

カピバラを悩ます軟便は治るのか？
～整腸剤投与による便状の回復の経過報告～

大谷 美穂子

金沢動物園では 2 頭のカピバラ (*Hydrochoerus hydrochaeris*) を飼育しているが、そのうち No.2 雌において、2025 年 4 月以降、泥状便および水様便の排出が認められた。食欲や活動性など一般状態には著変が認められなかったため、糞便検査を実施したところ真菌が検出された。しかし、カピバラは後腸発酵動物であり、腸内細菌叢の維持が重要であることから、抗真菌薬の投与は実施せず、整腸剤投与による便性状の改善を試みた。

併せて、通常給与している孟宗竹に加え、真竹や笹などを追加給与し、食物繊維摂取量の増加を図ったが、顕著な改善は認められなかった。

また同時期に、嗜好性の高い餌であったリンゴの搬入が中止となり、餌内容の変更を余儀なくされた。その代替として給与したレタスは嗜好性が高く、1 玉を丸ごと摂取可能であったため、レタス内に整腸剤を混和して投与したところ、便性状は回復傾向を示した。この投薬方法が確立できたため、以前使用した整腸剤の効果比較を実施した。

ビオフェルミン（大正製薬）、ミヤリサン（ミヤリサン製薬）、ラックビー（興和）を一定期間ごとに交代で投与した結果、当園飼育個体においてはラックビーが最も有効であることが示唆された。

さらに、便性状（固形便、泥状便、水様便）ごとに複数回の糞便検査を実施した結果、腸内常在絨毛虫数と便性状との関連が認められた。泥状便および水様便では多数の絨毛虫が確認されたが、その多くは死骸または不活性化した状態であった。これは、本来腸内に共生している絨毛虫が大量に体外へ排出され、腸内の絨毛虫数が減少していることを示唆している。

以上の結果から、カピバラにおいては常在絨毛虫を含む腸内環境が消化機能維持に重要であり、齧歯類でありながら草食性・後腸発酵動物として、食物繊維に富んだ飼料の継続的な給与が腸内環境維持に不可欠であると考えられた。